

## 博士学位論文審査報告書

大学名 早稲田大学  
 研究科名 スポーツ科学研究科  
 申請者氏名 醍醐 笑部  
 学位の種類 博士（スポーツ科学）  
 論文題目 スポーツ鑑賞能力とその教授方略：舞踊を手がかりとして  
 Appreciation Ability of Sports and Teaching Strategy : Focusing on Dance

論文審査員 主査 早稲田大学准教授 作野 誠一 博士（学術）（金沢大学）  
 副査 早稲田大学教授 友添 秀則 博士（人間科学）（早稲田大学）  
 副査 早稲田大学教授 松岡 宏高 Ph.D.（オハイオ州立大学）  
 副査 早稲田大学演劇博物館招聘研究員  
 稲田 奈緒美 博士（文学）（早稲田大学）  
 早稲田大学教授 木村 和彦

本学位申請論文は、人がスポーツをみる行為について、スポーツ鑑賞という概念を提起し、その能力構成と教授方略について検討したものである。「スポーツ鑑賞」という用語は、これまでも幾度か提唱されてきたが、スポーツマネジメントなどの領域で用いられる「スポーツ観戦」という用語に比べれば、社会的にも学術的にも広く普及・定着しているとはいえない。本論文は、スポーツをみるという行為を研究対象とするとき、従前のスポーツ観戦概念の枠組みではスポーツの文化的価値の拡大・創造の諸相を十分に捉えることができないという認識に立ち、スポーツ鑑賞行動の構造を理解したうえで、スポーツ鑑賞能力を具体的に明らかにするとともに、その効果的な教授方略を検討することを目的とした。そのために、以下に示す3つの下位課題を設定している。

- 1) スポーツ鑑賞を規定しスポーツ鑑賞行動の構造を提示すること
- 2) スポーツ鑑賞行動の構造化を通じてスポーツ鑑賞能力の構成要素を明らかにすること
- 3) 異なる学習方法による観客の変化やスポーツ鑑賞能力の比較から、効果的な教授方略について考察すること

第1章（研究Ⅰ）では、スポーツ鑑賞を規定し、スポーツ鑑賞行動の構造が提示された。ここでは、これまでのスポーツ観戦研究からスポーツ鑑賞研究への拡がりについて確認したうえで、スポーツ鑑賞研究が包含する研究領域について個別に検討を行い、スポーツ鑑賞行動の理論的構造を示した。これまでのスポーツ観戦研究の多くは、観客（観戦者）を消費者と捉え、消費者行動の分析視角からその量的増加や観戦頻度の増大に貢献する知見を蓄積してきた。しかしながら、個々の観戦者がスポーツの価値を享受するために必要とする知識、記憶、能力といった質的側面に焦点を絞った議論が十分に展開されているとはいえない。本論文では、スポーツをみるという知覚・認知による反応（態度や意図といった心理的变化）のみならず、価値を内面化し表出化する過程、さらには他者との価値共有やスポーツへの価

値の還元といった複数のフェーズから構成される循環プロセスが提示された。

第2章(研究Ⅱ)では、スポーツ鑑賞能力の構成要素について検討している。ここでは、舞踊評論家の成長過程に関する詳細なケース分析をもとに、スポーツ鑑賞行動の構造を具体化し、スポーツ鑑賞能力の構成要素を具体的に抽出した。分析を通じて、評論家には評論を書く以前に、形式化する力、身体共感力、集中力の3つがすでに存在していること、評論を書き始めた頃には概念の多様化が起こり、説明力、客観力、分析力、情報整理力が身につくこと、そして現在では情報集約力、対応力、評価能力が身につけていることが明らかにされた。この能力要素をもとに、スポーツ鑑賞行動の各フェーズにおいて求められる具体的な鑑賞能力の構成要素が配置され、例えば認知・知覚のフェーズでは目の前の選手に共感する「身体共感力」、そして新しいものに次々と対応していく「対応力」が、そして内面化のフェーズにおいて必要な能力は、情報処理の過程で求められる能力と同様のものであり、知り得た情報を知識として蓄積していくことの重要性が示された。以上の結果から、具体的な鑑賞能力とそれらが表れる時期は、一般的に知識が高度化し活用される過程と類似していることが明らかになった。これらの点をふまえて、先に示したスポーツ鑑賞行動の構造図に詳細な検討を加え、鑑賞能力の伸長や観客の成長について言及している。

第3章(研究Ⅲ)では、具体的な学習方法の違いによる観客の変化およびスポーツ鑑賞能力の比較から、効果的な教授方略について考察している。第1章ではスポーツ鑑賞能力の伸長、観客の成長には外面化や形式化といった表出化フェーズの重要性が示唆されたが、ここでは、舞踊の鑑賞授業において表出化を促すグループ(表出化高位)とそうでないグループ(表出化低位)との比較により、表出化がスポーツ鑑賞能力およびそれを支える観客の態度・行動意図の変化にどのような影響を与えるのかについて実証的に検証を行った。その結果、鑑賞授業の評価は鑑賞作品を実際に体験した表出化低位の「ワークショップ型(WS型)」において有意に向上した。態度・行動意図の一部については、表出化高位の「コミュニケーション型(COM型)」において有意に高く、ここからみる経験が踊ってみたいと思わせるきっかけになったことが示唆された。鑑賞作品についての記述量についてもCOM型の方が多く、さらに印象を記述する質問や作品の内容を問う質問に対してもCOM型が正確かつ詳細に記述していた。自己評価においては、「形式化する力」「客観力」「情報集約力」の伸長において有意差が認められ、表出化を促す鑑賞授業の効果は、情報を既存の知識と関連づけ、他者の意見を参考にしながら書いたり話したりする過程であることが明らかになった。

第4章では、本論文の総合的な考察を行っている。従来の「スポーツ観戦」に新たな視点を加えた「スポーツ鑑賞」というスポーツの見方を提案することによって、そこにあらわれる能力、能力伸長のための教授方略について総合的な議論を展開している。そのうえで、学校教育、スポーツ経営、メディアリテラシー教育への実践的インプリケーションを行っている。

なお、本論文が掲載された学術論文等は下記の通りである。

- 1) 醍醐笑部・木村和彦・作野誠一(2015)バレエDVD鑑賞前後における態度・行動意図の変容—大学バレエクラスを対象として. スポーツ科学研究 12: 21-41.
- 2) 醍醐笑部・木村和彦・作野誠一(印刷中)ダンス映像のプロダクト構造分析: スポーツ鑑賞授業のための基礎的考察. 日本体育・スポーツ経営学研究 29.

従来のスポーツ参与研究では、参加者、観戦者、ボランティアというように経営体の目的

に応じて個別に対象を措定してきたが、個人のなかでこうした「する」「みる」「支える」といった行動は独立しているわけではなく、何らかの関連性をもちながら共存していると考えられる。このうち「する」と「みる」については、「するスポーツ」が「みるスポーツ」（特に直接スポーツ観戦）につながることは実証されているものの、その逆については先験的に述べられるに留まるなど不明な点が多い。さらに「話す」「書く」「分析する」といった参与形態については、これまでほとんど取り上げられてこなかった。本論文は、スポーツ鑑賞の提案ならびに分析を通じて、こうした複数のスポーツ参与の関連性について検討したものであり、この点において研究上の意義が認められる。また、本論文で示唆されたスポーツの見せ方に関わる科学的知見は、人とスポーツの一時的な関係のみならず、長期的あるいは永続的な関係を研究の射程に入れており、生涯スポーツの観点からあるいはスポーツをみることに関わる経営体に対して有効な視座を提供すると考えられ、その意味で意義あるものといえる。

以上より、本論文は、博士(スポーツ科学)の学位を授与するに十分値するものと認める。

以 上